

第40回 俳人協会北海道支部定時総会



俳人協会北海道支部 第40回定時総会

北海道支部、第四十回定時総会は、五月十九日(日)、ホテル札幌ガーデンパレスに於て開催された。近くの大通公園では、ライラックまつりが開かれており、観光客の楽しそうな声が響いていた。

総会は、道内各地より四十九名の参加で開催された。まず、大郷石秋支部長の開会の挨拶があり、小林道彦氏が議長に選出されて議事に入った。

令和五年度事業・決算報告、並びに令和六年度事業計画案・予算案が審議され、全て原案通り承認された。役員改選では、長年支部に尽された大郷石秋支部長と滝谷泰星副支部長が退任して顧問に、岡澤草司副支部長が新支部長に就任するなどの案が承認された。今年九月には、北海道支部創立四十周年記念誌



俳人協会北海道支部会報

◇発行人 俳人協会北海道支部 岡澤草司
◇発行所 俳人協会北海道支部 事務局
☎ 005-0841
札幌市南区石山1条2丁目4-18
辰巳 奈優美 方

の発刊を予定し、昨年度に引き続き記念事業の基金を募ることも報告された。

第二十六回北海道俳人協会賞は、斎藤信義氏の句集『光る雪』が正賞に決定。平間純一選考委員長による選考経過についての説明があった。支部長より表彰を受けられた斎藤氏は、「命ある限り俳句を続けていきたいと思う」と力強い言葉を述べられた。

次いで、俳人協会理事長で、「沖」主宰の能村研三氏による記念講演が行われた。演題は「疾風で駆け抜けた俳句の情熱―福永耕二―」。四十二歳で早逝した福永耕二の足跡を紹介しながら熱く語られた。講演会は、新型コロナウイルス感染予防のためしばらく中止となり、五年ぶりに実施された。久々の講演に参加者一同、真摯に聞き入っていた。

最後に、第十六回俳句大会成績発表と顕彰が行われた。第一位の北海道知事賞は、へ切手ほどの灯台の窓鳥渡るを詠まれた岡崎市の水野幸子さん。遠方のため欠席だったが、惜しみな

い拍手が響いた。続いて、入賞作品及び選者特選句の披露、更に選者による丁寧な講評に参加者は真剣に耳を傾けていた。以上、閉会の辞をもって総会は無事終了した。

懇親会は、能村研三氏の出席もあり、終始和やかな雰囲気の中で行われた。結社の垣根を越えての歓談は貴重な機会であり、有意義な時間となった。

今後の支部の活動も感染予防に努めながら進めていきたいと考えております。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(佐藤やす美記)



支部長 就任によせて

岡澤 草司



今年五月の總會におきまして大郷石秋氏の後任を仰せつかりました。誠に浅学非才ではあります。誠にご力を尽くしてまいります。何卒よろしくお願い申し上げます。

当支部は昭和五十九年に結成され今年で四十周年を迎えます。この間には数え切れないほど多くの句が作られ、大会や吟行会など様々な機会を通して交流がなされてきました。

北海道支部規約には、「この会は俳句文芸の創造的発展とその普及に努力するとともに、会員の親睦を図ることを目的とする」とありますが、この目的が皆様のご協力により達成されてきたことに心より感謝申し上げます。支部四十年の足跡につきまして、この度上梓いたしました『創立四十周年記念誌』にまとめられておりますのでお読み頂ければ幸いに存じます。

現在の当支部の会員は約二百五十名になります。会員の皆様日々熱心に俳句と向かい合ひ四季折々の秀句を発表されています。ことに心より敬意を表するところであります。

さて、新しい年度(令和6年度)がスタートして早くも四月が過ぎました。九月には吟行会が小樽で開催され多くの秀句が生まれました。今後は第十七回俳句大会への句の募集が始まります。また、明年一月には新春句会、新年交礼会が開催されます。

現在、事務局の方々のご尽力により、それぞれの行事への準備が進んでおります。その都度ご案内申し上げます。多くの皆様のご参加をお待ち致しております。

俳句は新たな可能性を秘めた文学でもあると思います。「俳句をユネスコへ」の取組も進んでいます。これからも会員相互の連携を深めていきたいと思います。

皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈りいたしますとともに、俳人協会北海道支部への変わりぬご支援をお願い申し上げます。

謹悼 俳人協会名誉会長

鷹羽 狩行先生

鷹羽狩行先生(本名・高橋行雄)が令和六年五月二十七日ご逝去されました。享年九十三歳でした。

山形県新庄市生れ、山口誓子、秋元不死男に師事し、昭和四十年、三十五歳で第一句集『誕生』により俳人協会賞を受賞。その後芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞、蛇笏賞、詩歌文学館賞、日本藝術院賞等を受賞。毎日俳壇選者、日本藝術院会員。昭和五十三年「狩」創刊主宰、平成三十年「狩」終刊、三十一年「香雨」名譽主宰に就任。平成十四年、俳人協会会長に就任、二十九年に俳人協会会長を退き名譽会長に就任。

俳人協会の公益社団法人への移行、「俳句大賞」の設立、俳句のユネスコ無形文化遺産登録へ向けた推進協議会の設立等、俳人協会および俳句界のために尽力されました。

北海道支部總會にも二度お越しいただきました。一度目は、平成二十一年講演会の講師として、二度目は平成二十八年俳句

大会特別選者としてご来道され、北海道の俳人協会会員への大きな励みとなりました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

謹 悼

磯江 波響(壺)

R6・3・9 (90歳)

流水の沖一線を輝けり
開拓の駅通跡も麦の秋
〔壺〕令和4年4月号、
〔壺〕令和4年8月号より

中村 英史(樹)

R6・3・30 (91歳)

雪解了へ石狩大河澄みはじむ
湯たんばや遠退く日々も温めて
〔句集『石狩湾岸三』より〕

高瀬 恵子(アカシヤ)

R6・5・17 (97歳)

月光に輝く老いの登り坂
落旨し戦中戦後の味しみて
〔アカシヤ〕令和4年1月号、
〔アカシヤ〕令和6年7・8月号より

令和5年度収支決算書

収入の部

自 令和5年4月1日～至 令和6年3月31日

単位 円

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
年 会 費	625,000	615,000	-10,000	会 費 246名×2,500=615,000
事 業 費	640,000	461,000	-179,000	総 会 35名×6,000=210,000 吟行会 (熱中症警戒アラートにより中止) 第16回俳句大会 251組×1,000=251,000
創立40周年記念基金	0	547,500	547,500	547.5口×1,000=547,500
特別会計積立金取崩	0	100,000	100,000	
雑 収 入	0	10,062	10,062	寄付金 預金利子
繰 越 金	196,701	196,701	0	令和4年度より繰越
合 計	1,461,701	1,930,263	468,562	

支出の部

単位 円

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会 議 費	100,000	60,247	-39,753	理事会・事務局会議 役員行動費
印 刷 費	500,000	460,000	-40,000	会報2回 俳句大会作品集 賞状 名簿 総会資料 封筒
旅 費 交 通 費	20,000	7,900	-12,100	吟行地下見 旅費補助
通 信 費	260,000	186,915	-73,085	返信ハガキ 会報・俳句大会賞品発送
消 耗 品 費	20,000	10,213	-9,787	PC用紙・インク等事務用品
事 業 費	460,000	573,791	113,791	総会 北海道俳人協会賞 俳句大会賞 記念誌編集
慶 弔 費	20,000	5,445	-14,555	弔電
雑 費	60,000	49,562	-10,438	年会費振込料等
予 備 費	21,701	0	-21,701	
合 計	1,461,701	1,354,073	-107,628	

収支差額 総収入1,930,263円－総支出1,354,073円＝残金576,190円 令和6年度へ繰越

(注) 別途 特別会計積立金 450,000円を有する。

令和6年度予算(案)

収入の部

自 令和6年4月1日～至 令和7年3月31日

単位 円

科 目	前年度決算額	予 算 額	増 減	摘 要
年 会 費	615,000	625,000	10,000	年会費 250名×2,500=625,000
事 業 費	461,000	1,040,000	579,000	総 会 50名×6,000=300,000 吟行会 40名×5,000=200,000 第17回俳句大会 300組×1,000=300,000 新春句会・新年交礼会 40名×6,000=240,000
創立40周年記念基金	547,500	250,000	-297,500	
特別会計積立金取崩	100,000	0	-100,000	
雑 収 入	10,062	0	-10,062	預金利子
繰 越 金	196,701	576,190	379,489	令和5年度より繰越
合 計	1,930,263	2,491,190	560,927	

支出の部

単位 円

科 目	前年度決算額	予 算 額	増 減	摘 要
会 議 費	60,247	70,000	9,753	理事会 役員行動費
印 刷 費	460,000	500,000	40,000	会報2回 俳句大会作品集 名簿 総会資料 封筒 賞状 その他
旅 費 交 通 費	7,900	20,000	12,100	旅費補助 吟行地調査等
通 信 費	186,915	240,000	53,085	案内・返信用ハガキ 俳句大会賞品発送等 会報発送 その他
消 耗 品 費	10,213	20,000	9,787	PC用紙・インク等事務用品
事 業 費	573,791	940,000	366,209	総会 俳句大会賞品 北海道俳人協会賞 吟行会 事務局行動費 新春句会
創立40周年 記念誌	0	600,000	600,000	北海道支部創立40周年記念誌発刊
慶 弔 費	5,445	20,000	14,555	弔電等
雑 費	49,562	50,000	438	年会費払込料・振込手数料等
予 備 費	0	31,190	31,190	
合 計	1,354,073	2,491,190	1,137,117	

(注) 別途 特別会計積立金 450,000円を有する。

俳人協会北海道支部 第十六回 俳句大会

- 一位(13) 切手ほどの灯台の窓鳥渡る 岡崎 水野 幸子
 二位(11) もう五分待とうマフラー巻き直す 北見 真壁 静江
 二位(11) 落葉踏む嬉しき時は良き音に 札幌 斉藤みつ子
 二位(11) 寒波来る地球の軋む音のして 江別 西村 榮一
 三位(10) 灯を消して蛭に闇を譲りけり 石狩 赤繁 大河
 三位(10) 皺の手にクリーム勤労感謝の日 小樽 石井こう子
 四位(9) 雪晴や市電の映る理髪店 札幌 宮ケ丁孝子
 四位(9) 割算の余りのやうに生きて秋 札幌 平川 靖子
 四位(9) 月光の雫を絞る軒氷柱 札幌 小松 正幸
 四位(9) 早蕨や風車の丘へ牛放ち 札幌 池上 純子
 五位(8) 廃鉱の立坑 檜十三夜 札幌 幌谷口 浩文
 五位(8) 日向ぼことうと昭和へと戻る 旭川 斎藤 良子
 五位(8) 逆上がり教へ合ふ子ら若葉風 札幌 幌佐藤やす美
 六位(7) 新涼の垂直に立つ米袋 札幌 幌陽 美保子
 六位(7) 蝦夷富士のふんはり歪む石鹼玉 小樽 橋本 和男
 六位(7) ふるさとの紅葉栞りし時刻表 札幌 幌吉野 早苗
 六位(7) 花詞信じて買ひぬ種袋 大樹 伊藤 やす

※カッコ内は得点です。

※作品は同点の場合、特選句を優先とし投句の到着順としました。

選者特選句

- 飯川 久子 特選
 もう五分待とうマフラー巻き直す
 北見 真壁 静江
 石井こう子 特選
 二人目のお産おほらか新松子
 新十津川 金行 康子
 生出 紅南 特選
 廃校の空もガラスも鱗雲
 苫小牧 高谷 節子
 大内 鉄幹 特選
 ラガー等のあひ撲つ五体軋みけり
 帯広 山下 敦
 岡澤 草司 特選
 熊除けの鈴響き合ふ秋の山
 札幌 幌高田 喜代
 尾村 勝彦 特選
 もう五分待とうマフラー巻き直す
 北見 真壁 静江
 金行 康子 特選
 立冬や日向に止まる園児バス
 岩見沢 井上 厚明
 金田野歩女 特選
 雪晴や市電の映る理髪店
 札幌 幌宮ケ丁孝子
 狩野 和子 特選
 一杯の白湯の喉越し今朝の冬
 函館 斉藤ふじお

- 河原 小寒 特選
 新涼の垂直に立つ米袋
 札幌 幌陽 美保子
 久保田哲子 特選
 淡雪の手に掬いても刹那かな
 釧路 山本ひろし
 熊谷佳久子 特選
 安達太良山に無垢の空あり連翹忌
 札幌 尾村 勝彦
 清水 芳堂 特選
 冬日いま呑まんと海の沸騰す
 札幌 尾村 勝彦
 滝谷 泰星 特選
 落葉踏む嬉しき時は良き音に
 札幌 斉藤みつ子
 辰巳奈優美 特選
 かなしみは小房に分けて花椰菜
 比布村 一草
 田湯 岬 特選
 産み了へし鮭に瀬音のうすれゆく
 札幌 幌池野やまべ
 大郷 石秋 特選
 切手ほどの灯台の窓鳥渡る
 岡崎 水野 幸子
 土門きくゑ 特選
 どの子にも冬日分け合ふ鬼ごっこ
 函館 住吉紀美子
 中村 英史 特選
 夕焼をゆつくり仕舞ふ手稲山
 札幌 佐藤やす美



第四十回定時総会記念講演要旨 「疾風で駆け抜けた俳句の 情熱 — 福永耕二 —」

能村 研三先生

ご紹介いただきました能村研三と申します。平成二十四年に来札しましたので、今回で二回目です。

北海道立文学館の特別展で「虚子・年尾と北海道」を開催していますが、俳人協会の俳句文学館でも、「高浜虚子生誕百五周年」という記念展を行っています。以前は展示室をあまり公開していませんでしたが、今は春夏秋冬、色々な企画展をやっておりますので上京の折には、是非、新宿の次の大久保という駅で降りて、観に来て頂きたいと思います。

今日は「疾風で駆け抜けた俳句の情熱—福永耕二—」というお話をさせて頂きます。福永耕二の第二句集『踏歌』が文庫本になった時に解説を書き、その題名が今日の演題でもあります。

私が俳句を始めたのは、福永先生が居たからだと思います。父は六十歳（昭和四十五年）の時に「沖」を創刊しました。結社誌の事務や発送は家内工業で、当時大学生だった私が手伝うようになり、母の勧めもあって俳句の道に入りました。その後、福永先生の句会で、句を褒めて頂

いたことが一つの良い調子に乗らせてくれたきっかけとなったと思います。

父、能村登四郎と福永先生の出会いについてですが、父は私も六年間通った市川学園に四十年勤めました。また、秋櫻子の「馬酔木」の仕事をしていた関係で、当時鹿児島の子高の教師で「馬酔木」の巻頭を二十代で二回も取っていた福永先生が上京し、父の紹介で学園に採用が決まりました。二週間後に下宿先が決まるまでは、私の家で一緒に寝起きをしたのです。次の二句はその時の作品です。

花冷や履歴書に捺す磨滅印

黒板にわが文字のこす夏休み

毎週日曜日に吟行会をやっていました。先生のお子さんの名前も、水原秋櫻子先生が、第一句集、第二句集の名前に因んで命名されたということです。

「方向舵」という冊子を出しましたが、これはガリ版で作ったものです。その名は、先生が「沖」という雑誌の中で将来の舵取りをするのは君達ですよ」という気持ちで付けてくれました。その時の「方向舵」〇号には、先生の句

虎杖も葬り道辺の草と見つ
があります。お父様が亡くなり、鹿児島にお葬式に帰られた時の句です。その後、今度は創刊号を出して

昼寝覚足裏に風あそびをり
等の句を作られています。二
号、三号を出したかどうか記憶にありません。その十年後には、亡くなった先生を偲びつつ「舵」という雑誌を作成しました。

福永先生が上京されて五年目の昭和四十五年に「沖」が創刊されたのですが、その重鎮になれなかったのは、複雑なものなのです。秋櫻子は「福永耕二は石田波郷の再来」と言って、先生をとて大事にされています。それで「沖」を手伝うわけにも行かず、「馬酔木」の編集長として「沖」からは少し距離を置くようになって来るのです。

「沖」の第一回勉強会は、那須の塩原で開催し

かなかなや夕暮に似て深曇
という先生の句が、八十人中四十人の選に入り、勉強会賞になりました。第二回は千葉県旭市の飯岡で開催し、私の
海の果てに黒き海積み野分立つ

の句が、林翔先生の特選に入りました。この時は正木ゆう子、正木浩一、大関靖博などの若手メンバーでした。少しお酒が入り、福永先生を先頭に海に出てTシャツと短パンで泳ぎ、翌朝幹部同人にこっぴどく怒られました。先生も怒られた方の一人でしたが、そういう思い出があります。自宅にある福永耕二の財産である色紙と短冊を全部撮影してみました。

今年わが虹を見ざりし日記了ふ
あどけなき聲の二いろ木槿垣
立ち並び立ちしづまりし杉涼し
雪舞ふや樺のうしろも樺の影
句会の時に、色紙や短冊を持って行くと、先生がさらさらと書いてくれるのですが、残念ながら落款を押しているものが一つも無い。その代りにお酒の染みがあるので、これが落款だと自負しているのです。ある意味で天才だったのか、秋櫻子の字にも似ていて、師匠と仰ぐと字まで似るのかと思いました。

これは「沖」の七周年記念に載った文です。「俳句は姿勢だ、と僕は考える。俳句はそれを生きて行ずる人の姿勢である。俳

句という表現形式を愛し、それを人生と等価のものにして生きようと努力が俳句の歴史を貫いてきたと思っている。俳句を自分の生活の場から詠み起し、自分の生き方に対する考えや生活感情をその作品に投影させていくこと。俳句がその作者に自己変革を迫る厳しい形式であること」ということで、俳句を作るということは自分の生き方なのだということが、生き方があつてこそその俳句なのだ、今でもこの教えを守りながら俳句を作っているという気がします。

余生なほなすことあらむ冬菫
という秋櫻子の句があります。秋櫻子は、福永先生の第一句集『鳥語』の跋文で、この句を引き合いに出して「もつと明るく句を作れ」というようなことを言っています。

新宿ははるかなる墓碑鳥渡る
先生の句ですが、今の新宿はこんな感じではないです。一九八〇年頃の写真を探しましたが、恐らくこういう景ではなかったかと思えます。先生は幕張に住んで居られたが、秋櫻子の家が西荻窪、印刷屋が阿佐ヶ谷にあり、総武線から中央線で

一本です。鞆を提げてこの景色を行き来したのではないかと思います。

先生は「沖」が創刊されて十年目の昭和五十五年、四十二歳で亡くなるのですが、

侘助や生徒に会はぬ五十日
ぼろぼろの身を枯菊の見ゆる辺に
の二句が絶筆です。突然のその死に、父は、

若き日を見て来て氷柱一薙ぎに
の追悼句を贈っています。

先生の没後、昭和六十二年、
〔雲青嶺母ある限りわが故郷〕
という句碑が千貫平という東シ

ナ海が見える山に建ちました。

生家は、もう無いのですが、先生の句が書いてある墓碑があります。三月に訪ねた時に、お墓参りをしまして、向うには桜島も見えました。

最後は宣伝をさせて頂きます。有馬朗人先生、金子兜太先生、鷹羽狩行先生、稲畑汀子先生が提唱されて、俳句をユネスコ無形文化遺産に登録しようという運動があります。すでに和食が登録され、日本酒、書道が先行しており、四、五年はかかるかと思いますが、ご協力を宜しくお願いします。

俳人協会の会員は、今は一万五千人を欠く状況になっています。ある意味、危機的状況にあり、会費の値上げ案を出しましたが、定足数に満たず、本年は断念しました。代りに一般寄付をお願いしたところ、多くの方のご協力を得ました。貴重な資料を収集、公開する役目を持つ俳人協会に、支部からも絶大なご協力を戴きたく思います。ご清聴まことにありがとうございます。

(テープ起こし・大澤 久子
要約&文責・辰巳奈優美)



第26回 北海道俳人協会賞

句集『光る雪』

斎藤 信義氏(月の匣)



自選十句

暁を濡らせしはひとひらの雪
しろがねの日輪へ翔つ尾白鷺
をのこらは薄氷に乗り村離る
一水の別れに似たる洗膾かな
春ともし明るすぎるよ斎川浴
托卵といふ一芝居打つて鳴く
生も死も聖書も重し花ミモザ
今朝秋とおもふ心に風立ちぬ
天鼠めく雪の夕刊くばりかな
鈴の音天上にありクリスマス

受賞の言葉

斎藤 信義

この度は北海道俳人協会賞を戴くことになり、心から感謝申し上げます。

今回は第五句集であり、米寿の記念ぐらいの思いつきでの出版だったので、賞のことなどは全く考えては居りませんでした。句集を送付後に協会の事務局から連絡があり、賞の締め切りが三月末なので選考委員へ句集を送付するように要請され、大急ぎで送らせて頂きました。後日受賞の内示の電話をもらい驚いた次第です。

承知の通り第三句集『氷塵』で鮫島賞、第四句集『雪晴風』で北海道新聞俳句賞を戴いてをり、この上なく恵まれていることを痛感しております。

協会より「受賞のことば」を書くようにとの要請があり、何を述べれば良いのか迷ったのですが、句集の作品や俳歴に関することを書くのが一般的なのでしょうが、この度の句集、否、これまでの句集を貫いている十三字書きスタイルについて少し述べたいと思いつきました。

詳しくは受賞式でお話したく思いますので、ここではその経緯は決してストイックなものではないことを結論として言っておきたいと思っています。

そのきっかけとなったのは、第一句集『神色』の編纂時に廻ります。句集への作品を纏めたところ十三字書きの句が八〇パーセントもあるのに驚き、全ての句をそれに統一したのが始まりです。活版刷りだったため、活字を拾う手間が省けた、と一〇パーセントの割引が得られました。なぜ十三字に収まっていたのか考えたのですが、初心の頃の新人会(新層会)での活動がその因となったように思われます。どなたでも新人の頃にぶち当たる難しい漢字や難解な俳句の選句や鑑賞に悩まされた覚えがあると思います。

そのことに反発する一つの方策として、出来るだけ仮名書きとすること、平明な俳句であることを目指す鍛錬をしたことが挙げられるようです。その結果、漢字と仮名の配分が適切となり、句の姿や音読も柔らかな調べとなったようです。

従って十三文字書きは決して

ストイックな所産ではなく、私にとつては自然な俳句スタイルに過ぎないのです。

俳句は、目で読み、声を出して読み、短冊や色紙に書いて整う美しさが特徴の日本特有の省略詩なのではないでしょうか。この受賞を励みにしてよりいっそう精進したく思いますので、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

略歴

昭和十一年 北海道増毛町生れ。高校時代から俳句を始める。

昭和四十年 赴任地福岡で「菜穀火」に入会、野見山朱鳥に師事。

四年間直接指導を受ける。朱鳥の急逝により「円」誌創刊同人(初代編集長)。

昭和五十七年 東京に戻り「畦」入会(歿傍集同人)。

平成九年 主宰上田五千石急逝、「畦」廃刊。

平成十年 「松の花」創刊同人。

平成二十九年 「松の花」退会。

平成三十年 「月の匣」同人。

平成十四年より「俳句寺子屋」を主宰し現在に至る。

句集『神色』『天景』『氷塵』(鮫島賞)

『雪晴風』(北海道新聞俳句賞)

『光る雪』(北海道俳人協会賞)

選考委員評(五十音順)

選考委員長 平間 純一 評

書面による第一次審査を踏まえ、第二次審査では合議による審査を行った。

結果、一位に『光る雪』(斎藤信義)、二位に『8ビート』(中西史子)、三位に『白雲の郷』(田湯岬)となり、協会賞には『光る雪』が選ばれた。

『光る雪』は、北国の風土、情景を余すことなく詠み込み、その視点の豊かさは卓越している。

また、歳時記にとらわれず、北海道の季感を重視する姿勢にも共感する。ただ、一句十三字への美学には、共感できないところもある。

『8ビート』は、特に前半ほどの句も闊達で、わくわく感があ

り楽しさがある。
・丹頂鶴の恋のはじめは身をそらす
・七半の音置いてゆく夏休み
・白靴のジャズマンの踏む8ビート
など、その後の続きを知りたくなる。ただ、後半は、忌日俳句に凭れた感がある。

『白雲の郷』は、北海道の風土、歴史、暮らし、原発などに正面から取り組む姿勢に共感する。

・大寒といふ貫禄の手稲山
『石狩湾岸三』(中村英史)は、前作の一、二に続くもので、九十年の人生をたっぷり詠い上

げている。特に日常生活の場面が面白い。

・秋風裡叫びて釘の抜かれをり
『素風』(山下敦)は、人生の危機を何度となく乗り越えたればこそその安寧を謳い上げた。

・咳くほどに火を噴くとき手術痕
・しんしんとこころ澄むまで夜の雪
『従容』(小林道彦)も北海道の広々とした景色と歴史を正面に据え謳い上げている。

大澤 久子 評

『白雲の郷』(田湯岬)

俳句とは感動したことを記録して伝えるもの。感動を表現する俳句を目指してきたとの作者の言葉。自然や日常に向ける優しい目差し。率直で穏やかな詠みぶりが好感を与える。

・限りなく深き銀河や地震のあと
『素風』(山下敦)

がんを患い死に直面しながらも明るく日々を詠い家族への思いが優しい。日常を日記のように句にしているが、吟行句は特に趣きがある。実景と季語の取り合わせが効いている。

・守武の墓な崩れそ秋の蝶
『8ビート』(中西史子)

句材が豊富で対象を深く捉え言葉の斡旋が巧み。飽きが来ない。ただ詞書があっても「戦争が畳に座る晶子の忌」はあまりに白泉の「戦争が廊下の奥に立つてゐた」に類似。

・去年今年いのちを繋ぐいのちあり

『石狩湾岸三』(中村英史)

戦前戦中を生き抜かれ、肉親の死など人一倍戦争に対する想いが強いのではないか。骨太の肉体表現や重機表現が的確で実に力強い。人や物に対する優しさもあり剛柔併せ持つ。

・とんぼの死水に無言の輪が生れ
『従容』(小林道彦)

源先生には俳句の型・方向性を、田湯主宰に俳句の厳肅性などを教わっている。北海道に根差した俳句をつくっていきたいと記すように、北海道の旅吟が多く景がよく見える。

・凍裂や屯田兵の萎えぬ士気
『光る雪』(斎藤信義)

「雪」を詠わずして何の北方俳人かと力説している通り、雪や冬の句が多く、見事に北国の風土、情景を表現している。作者にとつて四百句の会心の一冊ではないかと思う。

・しろがねの日輪へ翔つ尾白鷺

小林布佐子 評

『光る雪』

平明で一句一句を詠む視点が定まっている。完成度の高さを感じ、最後まで緩みがなかった。北国を詠むというテーマが通底しており、構成も瑕疵がない。平明であるという俳句の根本を堪能させてもらった。

『8ビート』

発想の自由度に大きな魅力があり、新鮮で惹かれる句が多

かった。細やかな観察眼によつて、見えてくる色彩も豊かであつた。またことさら難しい言葉を使わずに詩情を生む力がある方だと感じた。

『白雲の郷』

身辺を彩る題材を見つめ、一貫して感じることを大切にしながら自分を通して詠んでいる。季語が多岐にわたり、よく吟味されている。人や物への思いを内包する一方で、自身の孤独をも詠み、等身大であることに惹かれた。

高橋 千草 評

『白雲の郷』(田湯岬)

・一段と白き暑寒の峰五月
・ムーミンが現れさうな冬の虹
・無骨さを自負する男雲の峰
北国の四季を適切に映し出して、懐が深く、安定した作者独自の世界が展開されている。

『素風』(山下敦)

同門であり、序文を書いた立場として講評を控えさせていた。この第二句集に見る作者の成長をうれしく思っている。

『8ビート』(中西史子)

・ハイヒールの音遠ざかる巴里祭
・人の輪の外側にゐる初霰
・船料理涼しき月を上げにけり
闊達で機知に富み、温かみのある一集。どの句からも作者像が浮かびあがる。

『石狩湾岸三』(中村英史)

・大いなる角ごと牡鹿振り向きぬ

・山麓線干し大根の裏に入る
・結氷湖僅かの風を音にして
句作への決して揺るがない姿勢が伝わる。内容に即した韻律、一語一語の斡旋、対象へのアプローチなど、秀でた句集であつた。

『従容』(小林道彦)

・気嵐や古き番屋の煙出し
・トロ箱の打重なりて寒の明け
・雪暗やライトアップの鉄の町
清潔感ただよう第一句集。ものがしつかりと捉えられている点に瞠目した。

『光る雪』(斎藤信義)

・山影が迫り一気に散りもみぢ
・さくさくと生者が通ふ霜の道
・最北の地にちりばめむ光る雪
長い句歴を有するひとの打ち出した新鮮な世界。覚悟のような気配さえ揺曳し、作品に勢いと重厚感がある。

竹内 直治 評

『白雲の郷』(田湯岬)

句集全体に纏まりがあり、共鳴出来る句が多く、読んで飽きない句集である。地名を入れた句は情景が分かり易く親しみ易いと感じた。ただ口語表現の句が幾つか見られたが、気になる程ではなかった。

『素風』(山下敦)

二回手術をされたとの事で、闘病の思いを感じた句もあつたが、全体的にはもう一歩踏み込んで欲しいと感じた。句集の最

後に
・来し方に二冊の句集すみれ草の一句があつたので、三冊目に挑戦して欲しいと思う。

『811』(中西史子)

作者の俳句の世界が分かる句集であるが、観念的な思いの句が多いと感じた。又イマジニ忌、安保の日、モンロー忌は季語となるのか疑問を感じた。その他、文語体の句における連体形の使い方に疑問を感じた。

『石狩湾岸三』(中村英史)

句集を読んで、どのようなお仕事をされていたのか垣間見ることが出来たと思う。句集全体では辞書に無い言葉が幾つかあり気になった。あとがきに遺句集めいたものであると書かれていたが、今後も俳句を楽しんで欲しい。

『従容』(小林道彦)

辞書に無い言葉が見られたが全体的には読み易い句集である。しかし、文語体の句において、下(上)二段活用である表現が口語の下(上)一段活用となつている句が幾つか見られたのは残念である。

『光る雪』(斎藤信義)

作者独自の工夫がみられる句集であるが、辞書に無い言葉が使われていて読み難い感じがした。又無季と思われる句も多くあつた。字数を十三字に合わせるためか、文語を口語表現にしているようで、読み難さがあつた。

第26回 北海道俳人協会賞 (R5.4.1~R6.3.31)

		竹内直治	大澤久子	高橋千草	平間純一	小林布佐子	合計
1	白雲の郷 田湯岬	1位	3位	3位		3位	6点
2	素風 山下						
3	811 中西史子		1位		1位	2位	8点
4	石狩湾岸三 中村英史	3位		1位	3位		5点
5	従容 小林道彦	2位					2点
6	光る雪 斎藤信義		2位	2位	2位	1位	9点

◎得点と賞の決定 1位3点、2位2点、3位1点としての合計です。

受贈句集・書籍紹介

◇『オルゴール』(アイワード)

岩城 睦子(道)

本句集は「道」同人である氏の第一句集である。句集名は「朧夜や昭和歌謡のオルゴール」より。定年後、平成十二年「道」入会。令和五年までの三三三三句を四章に編纂。主宰田湯岬氏の序文によると、作者は女性コーラスに所属し、俳句と合唱を両立。控えめな性格の作者の句集は、読み返すたび深さが伝わる」と評す。作者は能登半島の地震を知り、何が起るかわからな

◇『山河茫茫』(柏贈舎)

尾村 勝彦(葦牙)

本書は作者が俳誌「和賀江」に長年にわたり執筆してきたエッセイを基に、主宰を務める「葦牙」に寄せた文章や、俳句鑑賞文、氏の第二句集『海嶺』以後の自選句等を織り交ぜたエッセイ集である。全六章から構成され、「季節の窓」は春夏秋冬の各章に、ミニエッセイと自選二十句を掲げる。「話の小筐」には十九編のエッセイを掲載、書名ともなった一編「山河茫茫」では薄荷の香りと共に甦る父との思い出を綴っている。

・薄荷蒸す二日二夜は父の子に
「秀句鑑賞」には「葦牙」会員の句集と秀句を取り上げ、懇切丁寧なる鑑賞文を添えている。読者にはエッセイと俳句を同時に味わえる贅沢な一書となつて

(R6・2・16刊)
宮ヶ丁孝子 記